



関連の内外イベント

日本藻類学会第49回沖縄大会の様子を加藤亜記准教授(ブルーイノベーション部門 水産実験所)に報告していただきました。

日本藻類学会第49回沖縄大会(琉球大学)に参加しました

2025年3月21～23日の日程で、日本藻類学会第49回沖縄大会が琉球大学で開催されました。1952年に設立された日本藻類学会は、藻類に関する研究を幅広く対象とし、日本の藻類学分野において歴史ある学会です。今回の沖縄大会は、事前登録と当日参加を合わせて、例年よりやや多い260名以上の参加があり、発表数は、口頭発表67題、ポスター発表73題でした。とくに、気候変動の緩和策として、海域の主要な炭素吸収源である藻場の保全や創出が重要視されていることもあり、海藻や海草の成長特性や増養殖に関する研究発表には注目が集まっていました。



日本藻類学会第49回大会
(沖縄)



沖縄のシーサー

沖縄という地域色を生かした公開シンポジウムでは、サンゴに比べ、関心を持たれにくいサンゴ礁の藻場が果たしている機能や、絶滅危惧種のアオウミガメの食害により、海草藻場の衰退が世界的に進んでいる例などの話題提供がありました。さらに、公開企業セッションでは、新規微細藻類を活用した製品開発や観光との融合事業の紹介があり、全体を通して今後の藻類研究の進展を期待させる大会でした。

サンゴのような藻,「サンゴモ」の研究

加藤亜記 准教授

ブルーイノベーション部門 水産実験所

研究分野:藻類学, 植物分類学

研究キーワード:海藻類, 石灰藻, 生物多様性, 海藻養殖



研究概要

研究背景

サンゴモは、石灰質を体に沈着して石のように硬くなる海藻で、石灰藻とも呼ばれます。サンゴモは、サンゴとともにサンゴ礁を、さらにサンゴモのみの地形を形成して、さまざまな生物に住み場所を提供しています。近年、岩などに固着せず、球状に成長したサンゴモ球が集まった場所が同様な機能を持ち、さらに大型海藻の藻場を上回る炭素吸収能力を持つ可能性が報告されました。一方で、サンゴモの種によって、環境変化への感受性や、炭素吸収能力は異なります。そのため、こうした研究の検証には、サンゴモの正確な分類と分布域を理解する必要があります。

研究内容

私たちは、北西太平洋の無節サンゴモ*では、初めて分子系統解析を用いて分類学的再検討を始めました。以来、日本の亜熱帯から温帯で、形態的特徴のみで把握されていた分類群の数倍の多様性を明らかにしました。さらに、生育試験により、気候変動などの環境変化がサンゴモの成長に与える影響が、種によって異なることを明らかにしました。2024年度からは、これまで分子系統学的な研究が行われていなかった亜寒帯性の種について研究を進め、日本沿岸全域の種多様性解明を目指しています。



サンゴモ球。
(直径約2cm, 三重県志摩市座賀島)

*サンゴモの約7割を占め、サンゴ礁やサンゴモ球を形成する

研究相談、共同研究など大歓迎です

〒739-0046 広島県東広島市鏡山1丁目4-4

センターホームページ: <https://s-cnc.hiroshima-u.ac.jp>

E-mail: seto-carbonneutral@hiroshima-u.ac.jp

[編集・発行]

広島大学 瀬戸内CN国際共同研究センター